



秀長の領国は大和、紀伊、和泉、伊賀の4カ国83万石に及び、政権の東側一体を統治した。
出所：『羽柴秀長の生涯』（黒田基樹著・平凡社新書）

TOYRO特別セミナー講演録

羽柴（豊臣）秀長の生涯

—秀吉を支えた「補佐役」の実像—

駿河台大学 法学部 教授 **黒田 基樹**



はじめに

現在放映中のNHK大河ドラマ「豊臣兄弟！」の主人公、羽柴秀長はこれまで歴史の表舞台に出てくる人物ではなかった。だが、調べてみると、秀吉を補佐役として支えるだけでなく、秀長なしでは天下一統をなし得なかったと思えるほど、軍事、外交、領国統治などの面において稀有な能力を持ち合わせていた。その一端を紹介する。

秀長の生い立ちと名前の変遷

一昨年の初めにNHK大河ドラマ「豊臣兄弟！」の時代考証について依頼を受けたが、主人公の秀長については、まとまった研究がほとんどされていなかった。台本の作成に着手するまで半年という限られた時間の中で、秀長の家族構成、人物年譜、領国変遷などの基礎情報を整理し制作側へ提供した。その作業を通じて、秀吉の天下一統を8年で達成させた真の立役者が秀長であったことが明らかになった。

秀長は秀吉の唯一の弟で、3歳年下だ。秀長の名前は生涯を通じて何度も変わっている。最初は木下小一郎長秀と名乗った。この「長」の字は織田信長から与えられたものと推定され、秀長は、秀吉の弟でありながら織田信長の直臣として仕えていたことがわかる。その後、秀吉が織田家の家老になり、家老にふさわしい名字として「羽柴」に変えると、秀長も2年遅れて羽柴の名字に変更した。この名字変更によって、秀長は信長の直臣という立場から、秀吉の弟として秀吉を補佐する役割に就くことになった。

さらに通称も小一郎から官職名的美濃守に変わり、羽柴美濃守長秀となった。最後には実名が長秀から秀長に変わる。信長の「長」と秀吉の「秀」を上下にひっくり返した。織田家ゆかりの実名を廃止して、秀吉から与えられた実名を名乗ることで羽柴家の一門としての立場を表明するメッセージが込められている。

秀長は天正19（1591）年

1月に死去した。数え年で52歳であった。その前年に小田原合戦があり、関東・奥羽の大名たちが全て秀吉に帰属して天下一統が完成した。秀長はそれを見届ける形で死去した。

高い政治的地位にあった秀長

秀長が死去した時、秀吉は関白太政大臣であったが、武家中で秀長の上にいたのは政権主宰者である秀吉のみで、政治的に第2位の地位にあった。領国も最終的には大和、紀伊、和泉、伊賀の4カ国83万石に及んだ。政権首都は大坂のある摂津、そして直轄地の東山、河内から見て東側一帯全部が秀長の領国であったことから、政権首都を守る役割を果たしていたことがわかる。石高で秀長を超えていたのは、徳川家康の関東6カ国240万石と、毛利輝元の中国9カ国112万石という東西外様の大名のみで、秀吉の一門衆や旧織田家臣の中では最大であった。

天正13（1585）年から天正

16（1588）年の間、秀長は政権の後継者と目されていた。秀吉の養子であった於次秀勝が天正13（1585）年に死去し、天正17（1589）年に秀吉の嫡男である鶴松が誕生するまでの間、後継者がいなかったためである。

軍事面での卓越した能力

秀長の最大の功績の一つは、別

動隊総大将としての軍事行動である。天正5（1577）年の秀吉の中国攻めの際、秀吉本軍が播磨に進軍する一方、秀長は別編成軍の総大将を務めて但馬に進軍した。二正面作戦（※1）による秀吉の軍事行動は秀長がいたからこそ行えたのであり、これが天正15（1587）年の九州攻めまで続く。秀長の驚くべき点は、九州征

伐まで負けなしという戦績である。天正10（1582）年の本能寺の変から小田原合戦までのわずか8年という短期間で天下一統を遂げられたのは、秀長が常に別編成軍の総大将を務め、負けなしで戦争に勝利していたからである。

例えば、天正11（1583）年の賤ヶ岳合戦では、秀長は田上山と賤ヶ岳に布陣していた。そこへ柴田勝家軍先陣の佐久間盛政が突進してきて、秀吉方の中川清秀が戦死、高山右近が敗走するなど秀長の陣所まで迫ってきたが、秀長は防衛を貫徹した。秀長がここで持ちこたえたからこそ、美濃に進軍していた秀吉が戻ってくるこ

とができ、柴田軍に勝利を収めることができた。天正13（1585）年の四国攻めでは、秀長は当初先陣の総大将として出陣する予定だったが、結果として羽柴軍全軍の総大将を務め、長宗我部元親を降伏させた。天正15（1587）年の九州攻めでは秀吉が肥後路（現在の熊本県）方面に侵攻する一方、秀長は先陣の総大将を務め、

秀長の軍事行動

天正 5 (1577) 年	但馬侵攻以降、秀吉本軍とは別編成軍の総大将を務める。
天正10 (1582) 年	山崎合戦。天王山麓に布陣。明智討伐では、丹波経略。
天正11 (1583) 年	賤ヶ岳合戦。田上山・賤ヶ岳に布陣。
天正12 (1584) 年	小牧・長久手合戦。秀吉の尾張進軍時は伊勢侵攻、秀吉の伊勢進軍時は美濃・尾張に在陣。
天正13 (1585) 年	四国攻め。先陣の総大将。秀吉に出陣延期を要請、秀吉の出陣中止後は羽柴軍の総大将を務める。
天正15 (1587) 年	九州攻め。先陣の総大将、次いで日向侵攻軍の総大将を務める。

秀長が参加できなかったために東山道軍の総大将を務めた前田利家は、戦略が悪く二度にわたって秀吉から叱責を受けて謹慎させられている。東海道軍の別動隊の総大将を務めた浅野長吉も、秀吉から戦略について咎められている。前田や浅野は当時戦略に長けた人物という評価を受けていたが、この二人でさえ秀吉から叱責を受けていたことを考えると、秀長の軍事能力がいかに高かったかがわかる。

（※1）同時期に二つの異なる場所で、それぞれが異なる相手と戦う作戦。

外交役としての卓越した能力

秀長のもう一つの重要な功績は、外様の大大名に対する政治・軍事に関する意見係である「取次・指南」（※2）を務めたことである。秀長が指南を受け持っていた大名は、織田家当主である織田信雄、東国最大の大名である徳川家康、西国最大の大名である毛利輝元とその一門の小早川隆景、吉川元長・広家、土佐の

い。そのため、このような案件は秀長が担当して秀吉に申請し、結果として政治解決が行われている。

また、奉行に対して調停を行うこともできた。紛争については、双方の取り次ぎを側近奉行が分かれて担当し、その間で意見統一がなされて決裁案が作られ秀吉が承認する仕組みだったが、対立すると決裁案が作られず宙に浮いてしまう。そういった場合には、秀長が対立している双方の側近奉行に働きかけて決裁案を作らせ、秀吉に決裁を促した。

秀吉政権の要職を担う側近奉行に対して意見を言えるのも秀長だけであった。京都所司代として秀吉の京都行政を担っていた前田玄以が間違いを犯した際、秀長は「天下は天下のことだ。所司代は所詮当座のものだ。だから天下の法に従わなければいけない」と前田に意見したというエピソードが残っている。

また、秀吉は先陣にいる武将

長宗我部元親、豊後の大友宗麟・吉統、薩摩の島津義久・義弘といった錚々たる顔ぶれである。秀長は多くの外様大大名の「指南」を務め、政権の安定と従属維持に不可欠な役割を果たした。

秀吉は天正17（1589）年に、大名の妻をすべて京都の聚楽第に居住させるという政策をとった。諸国の戦国大名はそれまで地域では絶対的な地位にあり、人に従ったことなどない人たちである。そんな戦国大名にとって出仕して秀吉に頭を下げるだけでなく、妻まで京都に居住させることなど受け入れられない。その説得を秀長が担ったのだ。

島津との間では、九州攻めが終わってから日向の領地配分を行い、秀長はこねる島津と根気よく交渉して1年後に決着させた。地域の大大名を相手にした政治交渉は高度な政治能力が問われる。失敗すれば相手方の謀反もあり得るが、秀長がきちんと対応したために大名たちが秀吉の政権に服属し続けたのである。

に対して毎日頻繁に本部に連絡してくることを求めていたが、秀長に対しても「あなたが大事と思わないようなことでも連絡しなさい。私はそれらの情報をもとに判断する」と言っている。現場から離れている秀吉が現場の判断を行うためには現場の情報が必要だったからだ。四国を平定した後、秀吉は四国の統治方針を秀長に示し、阿波国は蜂須賀家政に与え、居城の場所まで指定した。現地を見ていないのに最適な立地を的確に指摘する秀吉もすごいが、その前段で秀長が判断材料となりうる情報を提供していたから秀吉も正しい判断ができたのである。

秀長なくして秀吉の天下一統はなかった

秀長クラスの大名の葬儀では7つの行事が行われる。それぞれの行事に能力のある僧侶が儀式を取り仕切り、故人を称える仏事香語（※3）を読み上げる。秀長の場合、その香語が1つだ

秀長の役割の重要性を端的に示しているのが、秀長が死去した時、指南を受けていた徳川家康、毛利輝元、長宗我部元親が葬儀に参列できなかったため追善供養を行った、という事実である。指南を受けていた大名が追善供養を行った事例は他にはなく、秀長がいかにそれらの大名と親密な関係を維持できていたかがうかがい知れる。

秀長のもう一つの重要な功績は、大坂政権の東側一帯の領国統治である。天正13（1585）年に大和を領国として与えられたが、中世以来、強大な神社権門が存在していた地域の統治は大変であった。一帯は秀吉政権が畿内において最後まで未征服だった地域で、大和の南、あるいは紀伊の東側を時間をかけて制圧し、統治していった。

（※2）「取次」は、秀吉の意向を大名に伝える役割。「指南」は、秀吉の代わりに地域や大名に公式見解や命令を発信し、政治的・軍事的な指導を行う上位の取次機能。

が残っており、「文武両道の武将であった」「武力は古代中国の名將に匹敵するようなものであった」と非常に褒められている。仏事香語を記す僧侶は地位が高く、当時における学者のような存在であるから基本的に権力者に過度な賛辞はしない。さらに性格にいても「権威があるのに威張らず、穏やかで思いやりがあった」と書かれている。ここまで表現されている香語は他に見たことがない。このような人柄だったからこそ、外様大大名への指南、秀吉への意見、側近奉行への調停などができていたのであろう。

秀長の名は歴史の表舞台では秀吉の影に隠れがちだが、軍事面での無敗の戦歴、外交における大大名との信頼関係の構築、畿内の要衝統治、そして秀吉への諫言と奉行への調停という政権運営に不可欠な役割を果たした人物であった。穏やかで思いやりがあり、威張らないという人柄とともに、文武両道の優



秀吉への意見具申と奉行への調停

その他にも秀長ならではの特有の役割があった。それは政権主宰者である秀吉に意見することである。秀吉への申請は側近奉行を通じて取り次がれるが、彼らは秀吉が不快に思う案件については叱責を恐れ取り次がな

れた能力を持つ秀長なくして、秀吉の天下一統はなかったのである。

（※3）葬儀や法要などの際、僧侶がお香を焚くときに、仏や亡くなった方に向けて唱える短い言葉や漢詩・和文の法語。

【略歴】

1965年、東京都生まれ。早稲田大学教育学部社会科地理歴史専修卒業。駒澤大学人文科学研究科日本史学専攻博士課程単位取得満期退学。博士（日本史学）。現在、駿河台大学法学部教授。NHK大河ドラマ『真田丸』（2016年）、2026年放送の同『豊臣兄弟！』の時代考証を担当する。

【書籍】

『羽柴を名乗った人々』『家康の天下支配戦略』『羽柴秀吉とその一族』『秀吉を天下人にした男 羽柴秀長 大大名との外交と領国統治』（講談社現代新書）、『羽柴秀長とその家臣たち 秀吉兄弟の天下一統を支えた18人』（角川選書）ほか多数。

本稿は、2026年7月9日に行われた「TOYRO特別セミナー」の要旨を編集部でまとめたものです。